

審査意見への対応を記載した書類（6月）

（目次）

1. 本専攻の養成する人材像、ディプロマ・ポリシー（DP）及びカリキュラム・ポリシー（CP）においては、「地域」に関する素養を掲げているものの、アドミッション・ポリシー（AP）では見受けられないことから、養成する人材像、DP及びCPとAPの整合性について明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。
（是正事項）・・・2
2. 本専攻の名称を「人文社会科学専攻」とすることについて、本専攻が、「人文社会科学の深化と融合によって創出される『総合知』を基盤とし、地域課題に対して新たな『意味的価値』を共創し、社会に実装できる高度専門人材」の養成を目的とした専攻であることがより明確になるよう、考え方を明示することが望ましい。
（改善事項）・・・5
3. 本専攻のカリキュラム・ポリシー（CP）1に基づき必修科目として配置している専攻共通科目「人文社会科学展望」及び「研究者倫理・アカデミックスキル」について、以下の点を踏まえて、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識や能力等が十分に身に付けられる授業科目であることを具体的に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。
 - ・ 「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.16のCP1（基盤的素養と俯瞰的視野の涵養）への対応において、授業科目「人文社会科学展望」により、「複合的な視点から課題解決にアプローチできる学際的素養を養う」と説明している。しかしながら、「シラバス」を確認する限り、全8回の授業においてCP1の目的を達成する十分な学修時間及び内容が担保されているのか判然としない。
（是正事項）・・・6
 - ・ 授業科目「研究者倫理・アカデミックスキル」の「シラバス」において、「e-ラーニング教材の受講と、対面（または双方向遠隔）による講義・ディスカッションを組み合わせる」と記載している。しかしながら、全8回の授業のほかに、どのような内容をe-ラーニング教材で学ぶのか判然としないため、CP1で掲げる「高い倫理観と汎用的な研究手法」を修得できるだけの十分な学修内容となっているのか判然としない。
（是正事項）・・・10
4. 「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.7において、本研究科の課題として「修士から博士への連続的な教育プログラムがない」ことを説明しているが、本専攻の設置によって、どのように既設の博士前期課程との教育課程上の連続性を持たせるのか、より明確にすることが望ましい。
（改善事項）・・・14
5. 社会人学生への対応について、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.29において「在職のまま学位取得を目指す社会人学生が、標準修業年限内に計画的な履修を行える体制を整える」と説明しているが、このような社会人学生向けの具体的な研究指導のスケジュールを明示することが望ましい。
（改善事項）・・・15
6. 審査意見1のとおり、アドミッション・ポリシーの妥当性が判然としないことから、入学者の選抜方法の妥当性も判断できない。このため、審査意見1への対応及び以下の点を踏まえ、アドミッション・ポリシーに基づいた適切な選抜方法となっていることを具体的に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。
 - ・ AP1に掲げる「知識・理解・表現」について、一般選抜においては「口述試験」及び「修士論文（または研究成果報告書）」で確認すると説明しているが、口述試験の具体的な内容が不明確である。
（是正事項）・・・17
 - ・ また、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.31において、「本学の博士前期課程（修士課程）の学内進学者については、学業成績証明書の提出等により、口述試験を免除することがある。」と説明している。しかしながら、「等」の内容が不明確であることに加え、具体的にどのような要件を満たす場合に口述試験が免除されるのか判然としないことから、AP1に掲げる資質・能力を適切に評価・判定できる選抜方法であるのか判断できない。
（是正事項）・・・18
7. 「学生の確保の見通し等を記載した書類（本文）」p.9において、「愛媛県内で卸売業を営む経営者から・・・文系であってもプログラムやICT、AIといったデジタル技術とその活用方法まで深い知識を備えた人材が欲しいとの声があり、該当する教育課程を備えた本課程の修了者が・・・採用されるという可能性も確認している。」と説明していることについて、当該説明が本専攻で養成される人材の需要を示す根拠であることがより明確になるよう、具体的な根拠を明示すること。
（改善事項）・・・19

(是正事項) 人文社会科学研究科 人文社会科学専攻 (D)

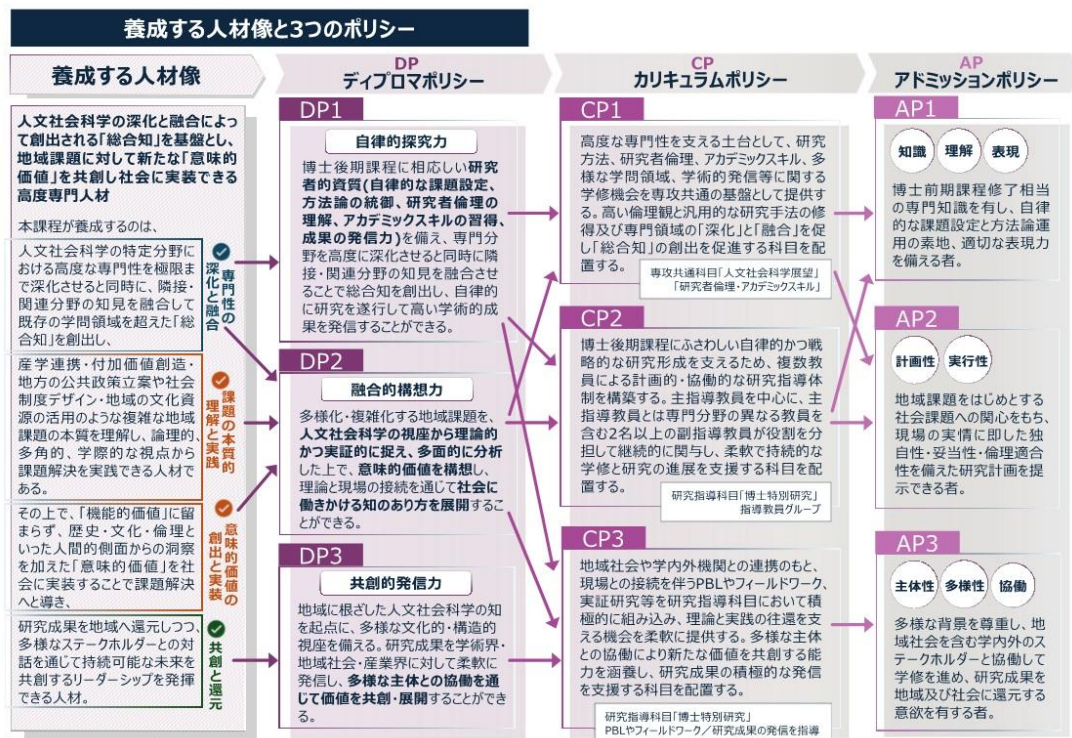
1. 本専攻の養成する人材像、ディプロマ・ポリシー (DP) 及びカリキュラム・ポリシー (CP) においては、「地域」に関する素養を掲げているものの、アドミッション・ポリシー (AP) では見受けられないことから、養成する人材像、DP及びCPとAPの整合性について明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

(対応)

本専攻の養成する人材像、DP及びCPにおいて「地域」に関する素養を掲げるに至った問題意識として、愛媛・四国地域をはじめとしたそれぞれの地域で責任を持ち、広い視点から課題を解決していける高度専門人材が不足しているという現状がある。こうした背景から、APにおいても、既に高度専門人材が多く集結している分野や場所以外の課題に対する関心や貢献の意識についても確認したいという趣旨で、「地域」の要素を記載することとした。

本専攻の目指す「社会実装」や「意味的価値の共創」はそれぞれの研究者単独では不可能であり、それゆえDPでは、多様な主体との協働から価値を創造していくこと、研究成果を地域社会を含む各方面へ広く発信することを目標として定めている。また、そこへ至るプロセスとしてCP3では地域を対象とした実地活動を積極的に組み込むこととしている。これらの基盤となる資質として、APでは地域社会との協働や研究成果の地域還元への強い意欲も必要不可欠であると考え、AP3に追記することとした。

本専攻の核となるミッションは、専門に閉じた研究者ではなく、地域課題を人文社会科学の視座からとらえ直し新しい価値を共創できる高度専門人材を養成することである。そのため、修士段階では理論的あるいは個別専門的な研究にとどまっていたとしても、本専攻への入学にあたっては研究計画段階で地域課題への関心があることは必須と考え、AP2に明記した。



(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
< 9 ページ > ①設置の趣旨及び必要性 4 3つのポリシー 【アドミッション・ポリシー (AP)】 AP1 (知識・理解・表現)：博士前期課程 (修士課程) 修了相当の専門知識を有し、自律的な課題設定と方法論運用の素地、適切な表現力を備える。 AP2 (計画性・実行性)：地域課題をはじめとする社会課題への関心を持ち、現場の実情に即した独自性・妥当性・倫理適合性を備えた研究計画を提示できる。 AP3 (主体性・多様性・協働)：多様な背景を尊重し、地域社会を含む学内外のステークホルダーと協働して学修を進め、研究成果を地域及び社会に還元する意欲を有する。	< 9 ページ > ①設置の趣旨及び必要性 4 3つのポリシー 【アドミッション・ポリシー (AP)】 AP1 (知識・理解・表現)：博士前期課程 (修士課程) 修了相当の専門知識を有し、自律的な課題設定と方法論運用の素地、適切な表現力を備える。 AP2 (計画性・実行性)：社会課題への関心を持ち、独自性・妥当性・倫理適合性を備えた研究計画を提示できる。 AP3 (主体性・多様性・協働)：多様な背景を尊重し、学内外のステークホルダーと協働して学修を進め、研究成果を社会に還元する意欲を有する。

<10ページ>

①設置の趣旨及び必要性

5 養成する人材像及び3つのポリシーの各項目との相関及び整合性

本課程では、人文社会科学の深化と融合によって創出される「総合知」を基盤とし、地域課題に対して新たな「意味的価値」を共創し、社会実装できる高度専門人材の養成を目的としている。このため、DP及びCPにおいて、地域課題を多面的・学際的に捉え、その解決に向けて理論と実践を往還しながら知を創出・展開する能力を重視している。このため、本課程においては、APにおいても、地域課題への関心を有し、それを学術的に探究し社会へ還元しようとする志向性を有している者を求めることを明示しており、DP2及びDP3で求める能力の基盤となる資質として位置づけている。

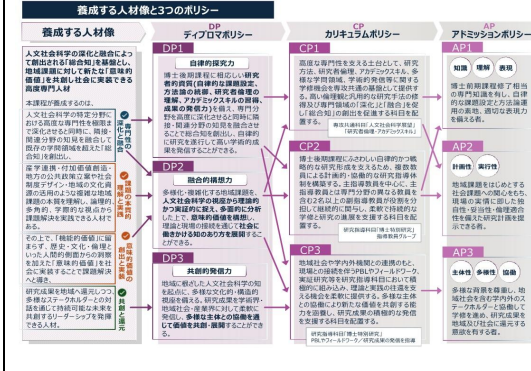
(追加)

<10ページ>

①設置の趣旨及び必要性

5 養成する人材像及び3つのポリシーの各項目との相関及び整合性

【資料2】養成する人材像と3つのポリシー

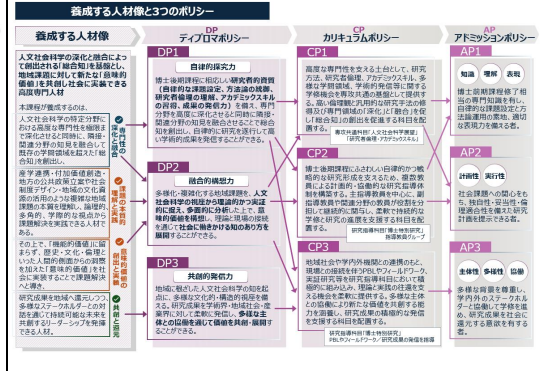


<10ページ>

①設置の趣旨及び必要性

5 養成する人材像及び3つのポリシーの各項目との相関及び整合性

【資料2】養成する人材像と3つのポリシー



(改善事項) 人文社会科学研究科 人文社会科学専攻 (D)

2. 本専攻の名称を「人文社会科学専攻」とすることについて、本専攻が、「人文社会科学の深化と融合によって創出される『総合知』を基盤とし、地域課題に対して新たな『意味的価値』を共創し、社会に実装できる高度専門人材」の養成を目的とした専攻であることがより明確になるよう、考え方を明示することが望ましい。

(対応)

従来の修士課程において「法文学専攻」及び「産業システム創成専攻」の2専攻に分かれていた人文社会科学研究科全体の資源を掛け合わせることで、深化と融合による『総合知』及び『意味的価値』を創出し、社会実装までの教育を行うことは十分可能と考える。

特に社会実装については、従来の「産業システム創成専攻」が注力しており、若年層の動態研究を起点とした産業界での人材活用手法の提案や商品開発で広く認知されているものの、修士課程では時間的制約が大きく、世間一般にイメージされているアカデミックな研究を主体とする「法文学専攻」で得られた知見まで横断して十分に理解し意味づけで活用するには至っていなかった。

本専攻は、研究基礎や専門分野内研究が主となる従来の修士課程では実現が難しい「融合的研究」に主眼を置いている。この点を端的に表現することを考え、専攻名と研究科名を同一にすることで、修士段階で2専攻に分かれていた専攻を一つに統合したことを学内外に分かりやすく示した。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<11～12ページ> ②研究科,専攻等の名称及び学位の名称 1 専攻の名称及び当該名称とする理由 設置する新たな専攻においては、人文社会科学の深化と融合によって創出される「総合知」を基盤とし、地域課題に対して新たな「意味的価値」を共創し、社会に実装できる高度専門人材を養成することを目的としている。 本専攻では、この設置の目的を果たすために、研究基礎や専門分野内での研究が主となる博士前期課程では実現が難しい「融合的研究」を主眼に置いていることを踏まえ、専攻の名称を「人文社会科学専攻 (Division of Humanities and Social Sciences)」とする。なお、博士前期課程については、従来の体制を引き継ぐことから、「法文学専攻」及び「産業システム創成専攻」の2専攻とする。	<11ページ> ②研究科,専攻等の名称及び学位の名称 1 専攻の名称及び当該名称とする理由 設置する新たな専攻においては、人文社会科学の深化と融合によって創出される「総合知」を基盤とし、地域課題に対して新たな「意味的価値」を共創し、社会に実装できる高度専門人材を養成する。また、専攻共通科目として「人文社会科学展望」(必修)を置き、人文社会科学の幅広い素養を学修する。このことを踏まえ、専攻の名称を「人文社会科学専攻 (Division of Humanities and Social Sciences)」とする。

(是正事項) 人文社会科学研究科 人文社会科学専攻 (D)

3. 本専攻のカリキュラム・ポリシー (CP) 1 に基づき必修科目として配置している専攻共通科目「人文社会科学展望」及び「研究者倫理・アカデミックスキル」について、以下の点を踏まえて、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識や能力等が十分に身に付けられる授業科目であることを具体的に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

- ・ 「設置の趣旨等を記載した書類 (本文)」 p.16のCP 1 (基盤的素養と俯瞰的視野の涵養) への対応において、授業科目「人文社会科学展望」により、「複合的な視点から課題解決にアプローチできる学際的素養を養う」と説明している。しかしながら、「シラバス」を確認する限り、全 8 回の授業においてCP 1 の目的を達成する十分な学修時間及び内容が担保されているのか判然としない。

(対応)

是正事項の核心が「学修内容とCP1の対応関係、および時間外学習の中身が示されていない」点にあると考え、両科目とも(a)各回とCP1要素の紐付け、(b)時間外学習の具体化、という二軸で対応した。

「人文社会科学展望」については、まず、本科目が知識を網羅的に教え俯瞰的視野を観念的に紹介するのではなく、学生が自身の博士研究において実際にDPで掲げた「深化と融合」を実現するための起点として機能する、すなわち、博士後期課程のスタートにおける融合へのマインドセットの変革と、俯瞰的視野の獲得に特化した触媒的科目として設計していることが、CPとの関係とともに明示できていなかったことを修正した。具体的には、CP1の主要な要素のうち主に「俯瞰的視野」「汎用的な研究手法」「専門領域の「深化」と「融合」による「総合知」の創出」を修得する科目と位置づけ、各回の授業が主にどの点の修得を目的としたものか「シラバス」に関係性を示した。

また、第7回までの各授業において担当教員が想定する分野横断的な展開を示すだけでなく、受講生自身が研究テーマとしたい分野の掛け合わせについて授業外で相談を受け付ける旨明記した。これにより、自らの専門分野を相対化し、その限界を認識したうえで他分野との融合の可能性を判断する力を養うことを意図している。その他、事前及び事後学習、最終レポートの具体的な時間と何を求めるかについても、具体的に追記した。これは時間外学習の毎回の積み重ねにより、学生は授業の都度、他分野の知見を自身の研究へ引き寄せて統合する作業を反復し、実質化することができることを意図している。

授業内容の修正としては、複合的な視点の涵養をより確実なものとするため、第8回で各学生の発表する研究構想に対し、担当教員全員が参加して討議を行うこととした。これにより、各学生の学位論文の準備期間を大きく損なうことなく、博士特別研究で展開する融合的研究にスムーズに接続することができる。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<14ページ> ③教育課程の編成の考え方及び特色 2 教育課程編成の特色 (1) 専攻共通科目 (必修) の設定 (基礎的素養の涵養) 高度な専門性を支える土台として、特定の専門分野に偏らない共通の素養を涵養するため、専攻共通の基盤的な学修機会である「専攻共通科目」を設定する。 「人文社会科学展望」 (1年次前期・必修・1単位) : <u>CP1に掲げる「基盤的素養と俯瞰的視野の涵養」を担う導入科目として位置づけ、多様な専門分野を横断的に知り、担当する複数の教員や履修学生同士の対話を通じて、分野横断的な基礎的素養を涵養し、現代的課題を俯瞰する。(オムニバス開講)</u> (略)	<14ページ> ③教育課程の編成の考え方及び特色 2 教育課程編成の特色 (1) 専攻共通科目 (必修) の設定 (基礎的素養の涵養) 高度な専門性を支える土台として、特定の専門分野に偏らない共通の素養を涵養するため、専攻共通の基盤的な学修機会である「専攻共通科目」を設定する。 「人文社会科学展望」 (1年次前期・必修・1単位) : 多様な専門分野を横断的に知り、担当する複数の教員や履修学生同士の対話を通じて、分野横断的な基礎的素養を涵養し、現代的課題を俯瞰する。(オムニバス開講) (略)

新	旧
< 2 ページ > 授業の目的 本科目は、<u>CP1に掲げる「基盤的素養と俯瞰的視野の涵養」を担う人文社会科学研究科博士後期課程の導入科目として位置づけており、</u>学生が自身の専門領域をより広い学域および社会的な文脈の中に位置づけ、地域課題の解決に資する「総合知」の基盤を築くことを目的とする。	< 2 ページ > 授業の目的 本科目は、人文社会科学研究科博士後期課程の導入科目として、学生が自身の専門領域をより広い学域および社会的な文脈の中に位置づけ、地域課題の解決に資する「総合知」の基盤を築くことを目的とする。
< 2 ページ > 授業の到達目標 本科目では、CP1に掲げる「<u>基盤的素養と俯瞰的視野の涵養</u>」を構成する主要な要素である、①俯瞰的視野の涵養、②汎用的な研究手法の修得、③専門領域の「<u>深化</u>」と「<u>融合</u>」による「<u>総合知</u>」の創出、の3点を体系的に修得する。 【俯瞰的視野・マインド】 自らの専門分野を相対化し、自身の専門性の限界を認識した上で、他分野との連携・融合の可能性を説明できる。<u>（CP1：俯瞰的視野の涵養）</u> 【地域課題の構造把握】 愛媛・四国地域の固有の課題を、人文社会科学の多面的な視点から分析し、その構造的背景を理解できる。<u>（CP1：汎用的な研究手法の修得）</u> 【グローバルな視座】 地域の課題や研究成果を国際的な文脈（SDGs等）の中に位置づけ、国際的に通用する論理で再構成する視座を獲得する。<u>（CP1：俯瞰的視野の涵養）</u> 【融合スキルの獲得】 異なる専門分野の用語や概念を翻訳し、学際的なアプローチによって社会的課題の解決に向けた新たな「総合知」を構想できる。<u>（CP1：専門領域の「深化」と「融合」による総合知の創出）</u> <u>これら4つの【到達目標】は、冒頭のCP1主要要素3点に対応する。</u>	< 2 ページ > 授業の到達目標 【俯瞰的視野・マインド】 自らの専門分野を相対化し、自身の専門性の限界を認識した上で、他分野との連携・融合の可能性を説明できる。 【地域課題の構造把握】 愛媛・四国地域の固有の課題を、人文社会科学の多面的な視点から分析し、その構造的背景を理解できる。 【グローバルな視座】 地域の課題や研究成果を国際的な文脈（SDGs等）の中に位置づけ、国際的に通用する論理で再構成する視座を獲得する。 【融合スキルの獲得】 異なる専門分野の用語や概念を翻訳し、学際的なアプローチによって社会的課題の解決に向けた新たな「総合知」を構想できる。
< 2 ページ > 授業の概要 本科目は、人文社会科学研究科博士後期課程の共通必修科目として、特定の専門分野（ディシプリン）の枠を超え、現代社会が直面する複雑な課題を俯瞰するための「総合知」の基盤を形成する。科学技術の進展に伴う倫理的・法的・社会的課題（ELSI）や、機能的価値から意味的価値への変容を踏まえ、人文社会科学の社会貢献のあり方を探究する。特に、本研究科が養成を目指す“人文社会科学の深化と融合によって創出される「総合知」を基盤とし、地域課題に対して新たな「意味的価値」を共創し、社会に実装できる高度専門人材”に共通して求められる能力、すなわち自律的探究力・融合的構想力・共創的発信力の基盤を養う。自らの専門性を客観視し、他分野と対話・融合するための「トランスディシプリン」や「領域横断的マインドセット」を涵養するとともに、理論と実践を架橋するための具体的スキルについても習得を目指す。なお、各担当教員が想定する分野横断的な展開を示すだけでなく、受講生自身が研究テーマとしたい分野の融合についても授業外で相談を受け付ける。	< 2 ページ > 授業の概要 本科目は、人文社会科学研究科博士後期課程の共通必修科目として、特定の専門分野（ディシプリン）の枠を超え、現代社会が直面する複雑な課題を俯瞰するための「総合知」の基盤を形成する。科学技術の進展に伴う倫理的・法的・社会的課題（ELSI）や、機能的価値から意味的価値への変容を踏まえ、人文社会科学の社会貢献のあり方を探究する。特に、本研究科が養成を目指す“人文社会科学の深化と融合によって創出される「総合知」を基盤とし、地域課題に対して新たな「意味的価値」を共創し、社会に実装できる高度専門人材”に共通して求められる能力、すなわち自律的探究力・融合的構想力・共創的発信力の基盤を養う。自らの専門性を客観視し、他分野と対話・融合するための「トランスディシプリン」や「領域横断的マインドセット」を涵養するとともに、理論と実践を架橋するための具体的スキルについても習得を目指す。

< 3 ページ > 授業スケジュール 第1回 人文社会科学と現代社会—総合知と「融合のマインドセット」— 博士人材に求められる「総合知」の意義を理解する。自らの専門性に固執せず、他分野と対話するための「トランスディシプリン」と「越境するマインド」について議論する。<u>（俯瞰的視野・マインド）（ルプレヒト クリストフ）</u> 第2回 地域課題の構造分析(1)—人口減少社会と地域デザイン— 【地域×社会科学】四国・愛媛の現状をデータに基づき分析し、持続可能な地域システムを議論する。<u>人口減少社会を題材として地域課題の構造を社会科学・人文科学の双方の視点から分析する。（地域課題の構造把握）</u>（石坂 晋哉） 第3回 地域課題の構造分析(2)—地域文化資源の再評価と継承— 【地域×人文科学】四国遍路等を事例に、文化資源（意味的価値）がいかに地域活性化に結びつくかを検討する。<u>地域文化資源を題材として地域課題の構造を人文科学の視点を強調しつつ領域横断的に分析する。（地域課題の構造把握）</u>（胡 光） 第4回 グローバルな視点と地域研究—SDGsとローカルな実践— 【国際的視点】環境、ジェンダー等の地域課題をSDGsの枠組みで捉え直し、地域固有の問題が世界共通の課題であることを理解する。<u>地域課題をグローバルな課題の中に位置づけ直し、多様な研究スコープを身につける。（グローバルな視座）</u>（鈴木静） 第5回 学術の国際化と発信—地域から世界へ— 日本の地域研究をいかに国際的な学術価値に変換するか。国際共同研究の事例を通じ、共創的発信力を養う。<u>自身の研究成果を、国内はもちろん国際的な研究業績として位置づけ発信することの意義を理解し、手法を身につける。（グローバルな視座）</u>（今泉 志奈子） 第6回 文理融合と新領域—異分野統合の方法論（Skills）— 防災、デジタル社会等の現代的課題に対し、異なる学問分野の手法をいかに組み合わせてアプローチするか（方法論のトライアンギュレーション等）、具体的な研究設計の技法を学ぶ。<u>事前配布される領域横断型の資料を基に、人文社会科学・自然科学のどの手法が組み合わせられているかを分析して授業に臨むこと。（融合スキルの獲得）</u>（ルプレヒト クリストフ） 第7回 キャリアと社会実装—博士人材の多様な展開— アカデミア、行政、企業等の多様なフィールドで「トランスファラブル・スキル」をいかに発揮するかを考える。<u>自分の研究分野が地域課題の文脈でどのように実装可能であるかを理解する。（融合スキルの獲得）</u>（岡本 隆）	< 2 ページ > 授業スケジュール 第1回 人文社会科学と現代社会—総合知と「融合のマインドセット」— 博士人材に求められる「総合知」の意義を理解する。自らの専門性に固執せず、他分野と対話するための「トランスディシプリン」と「越境するマインド」について議論する。（ルプレヒト クリストフ） 第2回 地域課題の構造分析(1)—人口減少社会と地域デザイン— 【地域×社会科学】四国・愛媛の現状をデータに基づき分析し、持続可能な地域システムを議論する。（石坂 晋哉） 第3回 地域課題の構造分析(2)—地域文化資源の再評価と継承— 【地域×人文科学】四国遍路等を事例に、文化資源（意味的価値）がいかに地域活性化に結びつくかを検討する。（胡 光） 第4回 グローバルな視点と地域研究—SDGsとローカルな実践— 【国際的視点】環境、ジェンダー等の地域課題をSDGsの枠組みで捉え直し、地域固有の問題が世界共通の課題であることを理解する。（鈴木静） 第5回 学術の国際化と発信—地域から世界へ— 日本の地域研究をいかに国際的な学術価値に変換するか。国際共同研究の事例を通じ、共創的発信力を養う。（今泉 志奈子） 第6回 文理融合と新領域—異分野統合の方法論（Skills）— 防災、デジタル社会等の現代的課題に対し、異なる学問分野の手法をいかに組み合わせてアプローチするか（方法論のトライアンギュレーション等）、具体的な研究設計の技法を学ぶ。（ルプレヒト クリストフ） 第7回 キャリアと社会実装—博士人材の多様な展開— アカデミア、行政、企業等の多様なフィールドで「トランスファラブル・スキル」をいかに発揮するかを考える。（岡本 隆） 第8回 総括：自律的研究の構想と「共創のプレゼンテーション」 自らの研究テーマを「地域的意義」と「国際的普遍性」の両面から再定義する。「自身の専門×隣接分野」による付加価値創造を具体的に提案・討議する。（岡本 隆）
--	---

第8回 総括：自律的研究の構想と「共創のプレゼンテーション」自らの研究テーマを「地域的意義」と「国際的普遍性」の両面から再定義する。「自身の専門×隣接分野」による付加価値創造を具体的に提案・討議する。具体的には、第1回～第7回で得た隣接分野の知見から最低1つ以上の視座を取り入れ、自らの研究テーマを地域的・国際的文脈に位置づけた「融合研究構想プロポーザル」を時間外に作成し、講義内で発表・討議を行う。（融合スキルの獲得）（胡 光、今泉 志奈子、鈴木 静、石坂 晋哉、岡本 隆、ルプレヒト クリストフ）	
< 3 ページ > 授業時間外学習にかかわる情報 主体的に授業の事前準備、事後学習、整理を行うこと。各自の専門分野だけでなく、関連する隣接分野の動向や社会的な課題の情報収集を行うこと。 積極的に深い討議ができるように授業に参加すること。具体的には、以下の事前学修および事後学修が毎回の授業で求められる。 <u>事前学修（1.5時間）：LMS（Moodle）を通じて事前に提示される担当教員の指定文献や資料・地域課題データを精読し、自らの専門分野の視点から疑問点や交差する論点を1枚の「事前シート」にまとめておくこと。</u> <u>事後学修（1時間）：他分野の概念や方法論を自らの研究テーマに「いかに統合し、どのような新しい視座を得たか」をリフレクションペーパーとしてまとめ、LMS経由で提出すること。</u> <u>最終レポート（10時間）：第1回～第8回で得た自分の研究分野および隣接分野の知見および授業内での討議を踏まえ、自身の研究に統合し、新しい視座を加え融合させた研究プロポーザルをまとめ、LMS経由で提出すること。</u>	< 3 ページ > 授業時間外学習にかかわる情報 主体的に授業の事前準備、事後学習、整理を行うこと。各自の専門分野だけでなく、関連する隣接分野の動向や社会的な課題の情報収集を行うこと。 積極的に深い討議ができるように授業に参加すること。

- ・授業科目「研究者倫理・アカデミックスキル」の「シラバス」において、「e-ラーニング教材の受講と、対面（または双方向遠隔）による講義・ディスカッションを組み合わせ実施する」と記載している。しかしながら、全8回の授業のほかに、どのような内容をe-ラーニング教材で学ぶのか判然としないため、CP1で掲げる「高い倫理観と汎用的な研究手法」を修得できるだけの十分な学修内容となっているのか判然としない。

(対応)

「研究者倫理・アカデミックスキル」については、CP1の主要な要素のうち主に「高い倫理観」「汎用的な研究手法」を修得する科目と位置づけ、各回の授業が主にどの点の修得を目的としたものか「シラバス」に係性を示した。

また、e-ラーニング教材で学ぶ内容についても旧シラバスは記載不足であったため、具体的に人文社会科学系研究者標準コースを明示し、7つのテーマを列挙することで内容を追記した。当該教材は本専攻担当教員も全員研究者として受講しており、研究者倫理に関する概念や用語の定義といった標準的な知識を身につけるのには有用である。これを事前に受講することにより、講義ではフィールドワークやアンケートといった実践において起こりうる問題等に集中できるという点で最適と判断して選定した。

その他、事前及び事後学習、最終レポートの具体的な時間と何を求めるかについても、具体的に追記する修正を行った。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<14ページ> ③教育課程の編成の考え方及び特色 2 教育課程編成の特色 (1) 専攻共通科目（必修）の設定（基礎的素養の涵養）（略） 「研究者倫理・アカデミックスキル」（1年次前期・必修・1単位）： CP1に掲げる「<u>高い倫理観と汎用的な研究手法</u>」の修得を担う科目として位置づけ、高度な研究遂行に不可欠な、研究者倫理及びアカデミックスキル（研究方法論）、学術的発信能力に加え、現代の研究者に必須のデータリテラシー等を学修する。	<14ページ> ③教育課程の編成の考え方及び特色 2 教育課程編成の特色 (1) 専攻共通科目（必修）の設定（基礎的素養の涵養）（略） 「研究者倫理・アカデミックスキル」（1年次前期・必修・1単位）： 高度な研究遂行に不可欠な、研究者倫理及びアカデミックスキル（研究方法論）、学術的発信能力に加え、現代の研究者に必須のデータリテラシー等を学修する。

(新旧対照表) シラバス 科目名：研究者倫理・アカデミックスキル

新	旧
< 4 ページ> 授業の目的 本科目は、CP1に掲げる「<u>基盤的素養</u>」のうち「<u>高い倫理観と汎用的な研究手法</u>」の修得を担う人文社会科学研究科博士後期課程の導入科目として位置づけている。自律した研究者として活動するために必須となる「責任ある研究活動（Responsible Conduct of Research）」の基礎知識と研究者倫理を涵養するとともに、博士後期課程における研究遂行に共通して必要となる研究データ管理、適切な引用とオーサiership、研究計画における倫理的配慮、利益相反管理、研究環境整備等のアカデミックスキル、学術的発信等の基盤的能力を修得することを目的とする。	< 4 ページ> 授業の目的 本授業は、自律した研究者として活動するために必須となる「責任ある研究活動（Responsible Conduct of Research）」の基礎知識と倫理観を修得することを目的とする。

< 4 ページ > 授業の到達目標 この授業の履修を通じて、学生は以下のことができるようになる。 捏造、改ざん、盗用（FFP）などの研究不正の定義を理解し、それを防止するための具体的な行動をとることができる。 研究データの適切な保存・管理方法、およびオーサiership（著者の資格）に関する国際的な規範を説明できる。 人を対象とする研究（アンケート、インタビュー等）におけるインフォームド・コンセントや個人情報保護の重要性を理解し、適切に計画できる。 産官学連携や地域協働活動における利益相反（COI）や守秘義務について理解し、適切に管理できる。 <u>適切なリサーチ・クエスチョンを設定し、先行研究を踏まえた研究計画書を自律的に作成できる。</u> <u>学術論文の論理構成・引用作法を理解し、査読付き論文の投稿・学会発表の準備ができる。</u> <u>図表等によりデータを適切に提示し、研究成果を学界・社会に発信できる。</u>	< 4 ページ > 授業の到達目標 この授業の履修を通じて、学生は以下のことができるようになる。 捏造、改ざん、盗用（FFP）などの研究不正の定義を理解し、それを防止するための具体的な行動をとることができる。 研究データの適切な保存・管理方法、およびオーサiership（著者の資格）に関する国際的な規範を説明できる。 人を対象とする研究（アンケート、インタビュー等）におけるインフォームド・コンセントや個人情報保護の重要性を理解し、適切に計画できる。 産官学連携や地域協働活動における利益相反（COI）や守秘義務について理解し、適切に管理できる。
< 4 ページ > 授業スケジュール （全8回相当 / 1単位）※e-ラーニング教材の受講と、対面（または双方向遠隔）による講義・ディスカッションを組み合わせて実施する。 <u>(1)e-learning教材では、eAPRIN人文社会科学系研究者標準コース（7単元）の責任ある研究活動（RCS:Responsible Conduct of Research）及び人文・社会科学と研究の公正性(IHS: Integrity for Humanities and Social sciences research)に関する標準的内容を指定モジュールの受講により体系的に修得する。テーマとしては、①研究活動における不正行為、②人文学・社会科学分野における盗用、③共同研究とオーサiership、④ピア・レビュー（査読）と利益相反、⑤公的研究費の取り扱い、⑥人文学・社会科学分野における研究の質と研究公正性との関係、⑦人文学・社会科学の学問特性と研究不正、を扱う。</u> <u>(2)授業では、これらの基礎事項を踏まえ、人文社会科学分野に特有の課題や、地域社会との共創・産官学連携に伴う倫理的・法的・社会的課題について、事例分析及び最終レポート作成を通じて具体的かつ実践的に学ぶ。</u> 各回のテーマと内容：	< 4 ページ > 授業スケジュール （全8回相当 / 1単位）※e-ラーニング教材の受講と、対面（または双方向遠隔）による講義・ディスカッションを組み合わせて実施する。 各回のテーマと内容： 第1回 科学者の社会的責任と行動規範・なぜ研究倫理が必要か・愛媛大学における研究活動の行動規範・学術研究の自律性と社会的信頼（中根 隆行） 第2回 研究不正（FFP）の防止・捏造、改ざん、盗用の定義と事例分析・不適切な引用（剽窃）の回避と正しい引用作法・自己盗用（二重投稿）の問題（中根 隆行） 第3回 研究データの管理・保存・実験・調査データの記録と保存義務（ラボノート、調査票等）・データの加工・処理における許容範囲・デジタルデータのセキュリティ（福井 秀樹） 第4回 研究成果の発表とオーサiership・論文著者の要件（オーサiership）と責任・不適切なオーサiership（ギフト、ゴースト等）・ハゲタカジャーナル（粗悪学術誌）への対応（福井 秀樹） 第5回 人を対象とする研究の倫理・「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」の理解・インフォームド・コンセントの手続き・人文社会科学系研究（フィールドワーク等）における配慮と倫理審査（折戸 洋子）

第1回 科学者の社会的責任と行動規範・なぜ研究倫理が必要か・愛媛大学における研究活動の行動規範・学術研究の自律性と社会的信頼 <u>(CP1：高い倫理観)</u> (岡本 隆) 第2回 研究不正 (FFP) の防止・捏造、改ざん、盗用の定義と事例分析・不適切な引用 (剽窃) の回避と正しい引用作法・自己盗用 (二重投稿) の問題 <u>(CP1：高い倫理観／引用・参照の適切性)</u> (中根 隆行) 第3回 研究データの管理・保存・実験・調査データの記録と保存義務 (ラボノート、調査票等)・データの加工・処理における許容範囲・デジタルデータのセキュリティ <u>(CP1：高い倫理観／研究手法)</u> (福井 秀樹) 第4回 研究成果の発表とオーサiership・論文著者の要件 (オーサiership) と責任・不適切なオーサiership (ギフト、ゴースト等)・ハゲタカジャーナル (粗悪学術誌) への対応 <u>(CP1：高い倫理観／研究手法)</u> (折戸 洋子) 第5回 人を対象とする研究の倫理・「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」の理解・インフォームド・コンセントの手続き・人文社会科学系研究 (フィールドワーク等) における配慮と倫理審査 <u>(CP1：高い倫理観／研究手法)</u> (ルブレヒト クリストフ) 第6回 利益相反 (COI) と産官学連携・利益相反の定義とマネジメント・地域共創・産学連携活動における守秘義務と契約・研究資金の適正な管理と使用 <u>(CP1：高い倫理観)</u> (折戸 洋子) 第7回 研究環境とハラスメント防止・アカデミック・ハラスメントの防止・メンターとメンティーの健全な関係・多様性の尊重と包摂的な研究環境の構築 <u>(CP1：高い倫理観)</u> (岡本 隆) 第8回 ケーススタディと総合討論・グレイゾーン事例を用いたグループディスカッション・「地域社会との共創」における倫理的ジレンマの検討・まとめと誓約書の提出 <u>(CP1：高い倫理観／研究手法)</u> (中根 隆行)	第6回 利益相反 (COI) と産官学連携・利益相反の定義とマネジメント・地域共創・産学連携活動における守秘義務と契約・研究資金の適正な管理と使用 (ルブレヒト クリストフ) 第7回 研究環境とハラスメント防止・アカデミック・ハラスメントの防止・メンターとメンティーの健全な関係・多様性の尊重と包摂的な研究環境の構築 (折戸 洋子) 第8回 ケーススタディと総合討論・グレイゾーン事例を用いたグループディスカッション・「地域社会との共創」における倫理的ジレンマの検討・まとめと誓約書の提出 (岡本 隆)
---	--

< 5 ページ > 授業時間外学習にかかわる情報 <u>指定されたe-learning教材の単元を計画的に受講し、基礎事項を修得しておくこと。授業後は講義内容の整理、自身の研究テーマに即した倫理的課題の検討等の事後学習を行うこと。</u> <u>具体的には、以下の事前学習および事後学習が毎回の授業で求められる。</u> <u>事前学習（1.5時間）：eAPRIN人文社会科学系研究者標準コース（7単元）による自学。</u> <u>事後学習（1時間）：講義内容を踏まえ、各回の研究者倫理・アカデミックスキルに関するリフレクションペーパーをまとめ、LMS経由で提出すること。</u> <u>最終レポート(10時間)：第1回～第8回を踏まえ、自身の研究テーマに関連する倫理的課題とその対策に加え、当該テーマの研究計画についてをまとめ、LMS経由で提出すること。</u>	< 4 ページ > 授業時間外学習にかかわる情報 主体的に授業の事前準備、事後学習、整理を行うこと。講義内容を深めるために、確認テストを積極的に活用すること。
--	---

(改善事項) 人文社会科学研究科 人文社会科学専攻 (D)

4. 「設置の趣旨等を記載した書類 (本文)」 p.7 において、本研究科の課題として「修士から博士への連続的な教育プログラムがない」ことを説明しているが、本専攻の設置によって、どのように既設の博士前期課程との教育課程上の連続性を持たせるのか、より明確にすることが望ましい。

(対応)

本専攻を設置することによる連続性が、博士前期課程と博士後期課程があるという形式的なものではないことを示す修正を行なった。すなわち、既設の博士前期課程との教育課程上の連続性としては、博士前期課程（修士課程）と連続した研究フィールドや研究課題を提供できるという実質的な利点と、単に同一の専門性を深めるのではなく、指導教員グループ制や横断的カリキュラムが研究の高度化・学際化を意図したものであるという点を強調した。

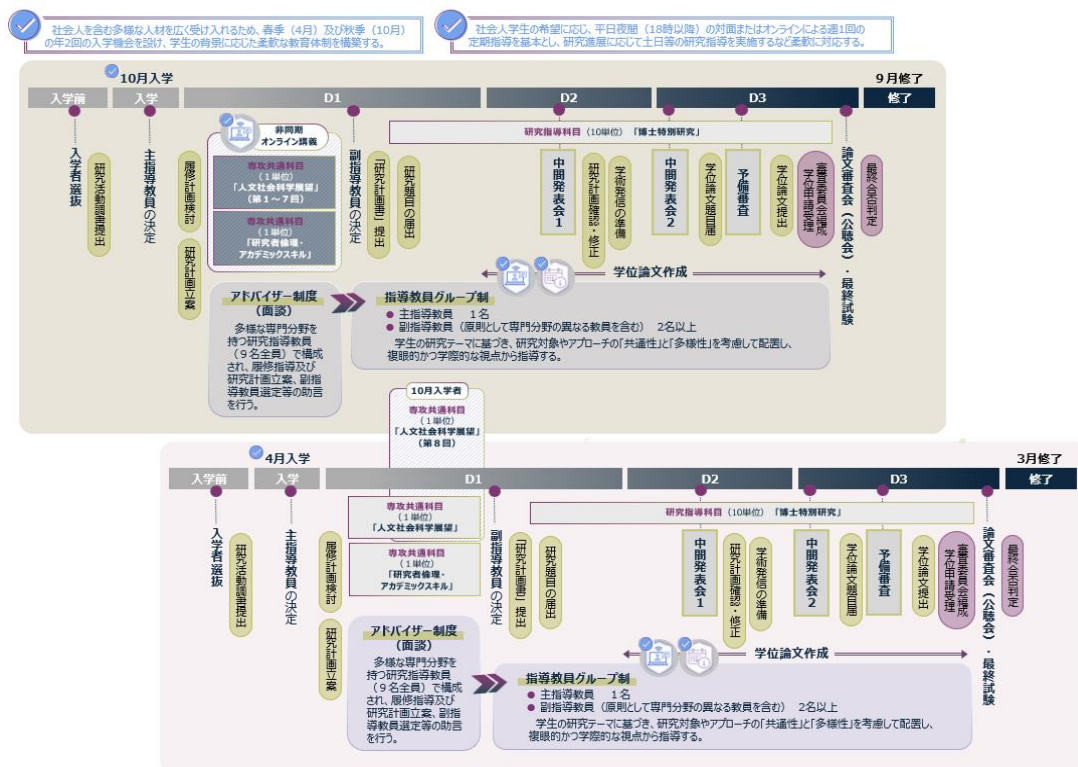
また、連続性のメリットを学生視点で具体的に示すために、「従来であれば学外の博士課程への進学を検討せざるを得なかった前期課程生も、研究フィールドや研究課題を変更することなく深化・融合させた研究を継続できる」という結語を追記することで、本専攻設置が前期・後期を貫く連続的教育課程を構築するものであることを明示する修正を行なった。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<26～27ページ> ⑤基礎となる学部（又は修士課程・博士前期課程）との関係 2「専門性の深化」と「異分野融合」による教育の高度化 本課程では、修士課程で修得した専門知識や研究手法を、博士レベルの高度な専門性へと「深化」させることと同時に、異分野の知見を取り入れて「融合」させることも重視する。例えば、修士課程において「文学」や「歴史」を専攻した学生が、本課程においては「経営学」や「法学」の視点を取り入れることで、地域文化資源を観光ビジネスや政策提言へと昇華させるといった展開が可能となる。このように、修士課程での「個別の専門知」を、博士後期課程における指導教員グループ制や横断的カリキュラムを通じて、専門分野以外の視点と理解に関心を持ち、異分野間での協働を通して、「社会課題解決に資する総合知」へと深化させる教育課程を編成している。以上のように、修士課程で形成された専門分野における研究課題を基盤として、博士後期課程では当該課題をより高度化・学際化し、理論と実証の往還を通じて学術成果及び社会実装へと展開する連続的教育課程を構築している。これにより、従来であれば学外の博士課程への進学を検討せざるを得なかった本研究科の博士前期課程（修士課程）生も、研究フィールドや研究課題を変更することなく深化・融合させた研究を継続することができる。	<26ページ> ⑤基礎となる学部（又は修士課程・博士前期課程）との関係 2「専門性の深化」と「異分野融合」による教育の高度化 本課程では、修士課程で修得した専門知識や研究手法を、博士レベルの高度な専門性へと「深化」させることと同時に、異分野の知見を取り入れて「融合」させることも重視する。例えば、修士課程において「文学」や「歴史」を専攻した学生が、本課程においては「経営学」や「法学」の視点を取り入れることで、地域文化資源を観光ビジネスや政策提言へと昇華させるといった展開が可能となる。このように、修士課程での「個別の専門知」を、博士後期課程における指導教員グループ制や横断的カリキュラムを通じて、専門分野以外の視点と理解に関心を持ち、異分野間での協働を通して、「社会課題解決に資する総合知」へと深化させる教育課程を編成している。

5. 社会人学生への対応について、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.29において「在職のまま学位取得を目指す社会人学生が、標準修業年限内に計画的な履修を行える体制を整える」と説明しているが、このような社会人学生向けの具体的な研究指導のスケジュールを明示することが望ましい。

「在職のまま標準修業年限内に修了できる実効性」を示すために、指導の頻度・時間帯・形式が標準的な学生と遜色ないことを具体的に示す修正を行なった。旧記述は「夜間・土日も可能」「時間外学習を工夫」と抽象的で、指導密度が具体的になかったため、社会人学生の希望に応じた研究指導として、定期指導を平日夜間又はオンラインに設定することを可能とし、標準的なスケジュールと比較して指導の頻度を落とさないようにすることを記載する修正を行なった。さらに、研究進展によっては休日の指導にも対応することとして追記した。



新	旧
<29～30ページ> ⑦「大学院設置基準」第2条の2又は第14条による教育方法の実施 2 履修指導及び研究指導の方法 社会人学生への履修指導及び研究指導については、主指導教員を含むアドバイザー制度の教員が社会人学生と研究計画の打合せを行い、計画的に履修及び研究ができるよう指導する。 また、社会人学生に配慮し、時間外等の学修ができるように履修方法を工夫する。社会人学生の研究指導については、<u>社会人学生の希望に応じ、平日夜間（18時以降）の対面またはオンラインによる週1回の定期指導を基本とし、研究進展に応じて土日等の研究指導を実施し柔軟に対応する。</u>これにより、在職のまま学位取得を目指す社会人学生が、標準修業年限内に計画的な履修を行える体制を整える。	<28～29ページ> ⑦「大学院設置基準」第2条の2又は第14条による教育方法の実施 2 履修指導及び研究指導の方法 社会人学生への履修指導及び研究指導については、主指導教員を含むアドバイザー制度の教員が社会人学生と研究計画の打合せを行い、計画的に履修及び研究ができるよう指導する。 また、社会人学生に配慮し、時間外等の学修ができるように履修方法を工夫する。社会人学生の研究指導については、夜間時間帯や土日等の研究指導の実施も可能とする。これにより、在職のまま学位取得を目指す社会人学生が、標準修業年限内に計画的な履修を行える体制を整える。

(是正事項) 人文社会科学研究科 人文社会科学専攻 (D)

6. 審査意見1のとおり、アドミッション・ポリシーの妥当性が判然としないことから、入学者の選抜方法の妥当性も判断できない。このため、審査意見1への対応及び以下の点を踏まえ、アドミッション・ポリシーに基づいた適切な選抜方法となっていることを具体的に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

- ・ AP1に掲げる「知識・理解・表現」について、一般選抜においては「口述試験」及び「修士論文（または研究成果報告書）」で確認すると説明しているが、口述試験の具体的な内容が不明確である。

(対応)

No.1のAPの整合性が修正されたことを前提として、入学者選抜がAPを多面的かつ適切に評価する仕組みになっていることを具体的に示す修正を行なった。評価観点をAP1からAP3に明示的に対応づけて重点項目を列举する修正を行なった。また、「地域」に関連する記載を追記することで、No.1のAP改訂と一貫性を持たせ、APとの整合性を示す修正を行なった。

口述試験の具体的な内容として、志願者による研究計画のプレゼンテーションから試験委員との質疑応答を経て、各委員が「専門知識の深度」「課題の認識・理解、表現力・論理的説明力」(AP1関連)、「地域課題をはじめとする社会課題への関心」「課題設定の独自性・妥当性」「研究の計画性」(AP2関連)、「主体性」「コミュニケーション能力」「多様な背景の尊重」「研究成果の地域及び社会への還元への意欲」(AP3関連)の重点項目に基づいて採点することを追記した。評価の手続についても具体的に記載することで、評価の客観性を担保できるように修正を行なった。選抜方法としては、単に知識・能力のみを問うのではなく、APに掲げた表現力や幅広いステークホルダーとの協働の素地としてのコミュニケーション能力を含めて総合的に審査するために口述試験としている。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<33～34ページ> ⑨入学者選抜の概要 3 アドミッション・ポリシーと入学者選抜との対応 ・口述試験：専門知識の深度、課題の認識・理解、表現力・論理的説明力 (AP1関連)、地域課題をはじめとする社会課題への関心、課題設定の<u>独自性・妥当性</u>、研究の計画性 (AP2関連)、さらに、主体性、コミュニケーション能力、多様な背景の尊重、研究成果の<u>地域及び社会への還元への意欲</u> (AP3関連) を重点的に評価する。 <u>口述試験の試験委員は主指導教員候補を含む3名以上とし、30～50分程度を目安に、志願者による研究計画のプレゼンテーション＋試験委員との質疑応答で構成する。</u> <u>評価は各委員が上記の重点項目に基づいて独立採点し、合議で最終評価を確定する。</u>	<32～33ページ> ⑨入学者選抜の概要 3 アドミッション・ポリシーと入学者選抜との対応 ・口述試験：専門知識の深度、課題設定と方法論運用の素地 (AP1関連)、課題設定の妥当性、研究の計画性、社会課題への関心 (AP2関連)、さらに、主体性、コミュニケーション能力、多様な背景の尊重、研究発表意欲 (AP3関連) を重点的に評価する。
<34ページ> ⑨入学者選抜の概要 3 アドミッション・ポリシーと入学者選抜との対応 ・研究計画書：課題設定の妥当性、研究の計画性、及び<u>地域課題をはじめとする社会課題への関心</u> (AP2関連) を評価する。	<33ページ> ⑨入学者選抜の概要 3 アドミッション・ポリシーと入学者選抜との対応 ・研究計画書：課題設定の妥当性、研究の計画性、及び社会課題への関心 (AP2関連) を評価する。

- また、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.31において、「本学の博士前期課程（修士課程）の学内進学者については、学業成績証明書の提出等により、口述試験を免除することがある。」と説明している。しかしながら、「等」の内容が不明確であることに加え、具体的にどのような要件を満たす場合に口述試験が免除されるのか判然としないことから、AP 1に掲げる資質・能力を適切に評価・判定できる選抜方法であるのか判断できない。

（対応）

学内進学者の口述試験免除については、要件を精緻化して免除を維持する選択肢もあったが、修正後のAPが地域志向を含めて全志願者に口述試験で確認すべき資質を求める以上、書類のみで代替できる免除はAP評価の一貫性と相容れないと考えられる。修正後のAPに掲げる態度・姿勢は、志願者全員に対し口述試験によって適切に評価・判定する必要があるものと再検討したため、一部学内進学者に対する免除は行わないこととした。全員口述試験を課すことで、AP評価の一貫性・公平性を高め、判断の透明性も確保できることを意図して、この修正を行う結論に至った。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<32ページ> ⑨入学者選抜の概要 2入学者選抜の基本方針 (1) 一般選抜（4月入学） （略） <u>（削除）</u>	<31～32ページ> ⑨入学者選抜の概要 2入学者選抜の基本方針 (1) 一般選抜（4月入学） （略） また、本学の博士前期課程（修士課程）の学内進学者については、学業成績証明書の提出等により、口述試験を免除することがある。

(改善事項) 人文社会科学研究科 人文社会科学専攻 (D)

7. 「学生の確保の見通し等を記載した書類（本文）」 p.9 において、「愛媛県内で卸売業を営む経営者から・・・文系であってもプログラムやICT、AI といったデジタル技術とその活用方法まで深い知識を備えた人材が欲しいとの声があり、該当する教育課程を備えた本課程の修了者が・・・採用されるという可能性も確認している。」と説明していることについて、当該説明が本専攻で養成される人材の需要を示す根拠であることがより明確になるよう、具体的な根拠を明示すること。

(対応)

当該ヒアリング対象者は、文系人材にプログラムやICT、AI といったデジタル技術の開発自体ができることを求めているわけではなく、それらを活用することによってマネジメントの観点から効率化を提案したり、得られたデータを正しく取り扱い意味を読み解いたりすることのできる人材が欲しいとのことだったため、記載を修正した。

この修正により、「マネジメントの観点から効率化を提案したり、得られたデータを正しく取り扱い意味を読み解いたりすることのできる」ことが明示され、本専攻が意図している意味がわかりやすくなったと考える。

(新旧対照表) 学生の確保の見通し等を記載した書類

新	旧
< 9 ページ > 3.養成する人材の社会的要請や人材需要の動向 (略) また、愛媛県内で卸売業を営む経営者から雇用する立場の意見として、文系であってもプログラムやICT、AI といったデジタル技術の活用によってマネジメントの観点から効率化を提案したり、得られたデータを正しく取り扱い意味を読み解いたりすることのできる人材が欲しいとの声があり、該当する教育課程を備えた本課程の修了者が民間企業に新規に採用されるという可能性も確認している。	< 9 ページ > 3.養成する人材の社会的要請や人材需要の動向 (略) また、愛媛県内で卸売業を営む経営者から雇用する立場の意見として、文系であってもプログラムやICT、AI といったデジタル技術とその活用方法まで深い知識を備えた人材が欲しいとの声があり、該当する教育課程を備えた本課程の修了者が民間企業に新規に採用されるという可能性も確認している。